

河上肇記念会報

No. 2.

1977. 1.

〒 530

大阪市北区梅ヶ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内 河上肇記念会
電話（〇六）三六四一六七七一
振替口座 大阪 三三一九五

新春に当って

末 川 博

新春を賀しあげます。

三十年あまり前に世を去った河上肇は、既に歴史上の人となったといえるであらうけれども、なお河上の言葉を聞いたたり、河上の風姿に接したりして、彼をなつかしんでいる人も少なくない。

そして近ごろは、河上という現実生きていた人間を知らなくても、彼の人となりや思想や生き方などについて関心をもって、彼を知ろうとする若い人たちが増えて、しかも河上の学問的な業績だけではなく、内面的な人間としてのあり方まで探ろうとする研究者も現われている。

こうした新旧にわたる人たちが集まって結成している河上ゆかりの会合には、東に東京河上会があり、西に河上肇記念会があって、年々歳々会合を開いて、互いの旧交を温めながら河上に関する回想ないし研究を深めている。しかも東京河上会では早くから『河上会会報』を発行して、既に四十一号に及んでいる。

そこで、西の方で出す河上肇記念会会報は東の会報と協力し提携する

目 次

新春に当って（末川博）	一
昭和五十一年度総会報告	二
河上肇の人と学問（相沢秀一）	三
第一回講演会報告	五
経済理論学会の記念行事について（杉原四郎）	六
第三十回京大河上祭報告	六
近大学術祭記念行事報告	七
京都府立総合資料館の「河上文庫」について（竹林忠男）	七
法然院墓地ガイド	八
河上肇歌碑拓本のこと（大久保雅興）	九
事務局たより	一〇
編集後記にかえて	一二

ことになっている。河上をしのんでその霊をなぐさめ、その墓に詣でる会合は、東西を問わず集まって毎年のように河上の墓のある洛東法然院で行われてきたのであるが、さらに東と西とが呼応して、紙の上でも河上の研究や回顧に資そうとしているのである。

ところで、河上肇研究ともいふべきものは、だんだん広く深く行われてきて、全国的に高まっているのであって、いろいろの方面でこれを見ることが出来る。たとえば、『社会問題研究』という雑誌を集めて複刻版が出されたのは、河上が執筆した当時のままの形で、これに親しもうとする傾向を現わしているともいえるであろう。ところが、最近彼の『自叙伝』が読み易くて現代かなづかいを用いた本となつて、岩波文庫のなかで普及され、広く若い人たちにも読まれている。

新旧を問わず、こうして河上に關する関心が高まるなかで、この会報も何かの役に立つことができれば幸である。

現に大阪では、学生諸君を中心に河上研究会というようなものを組織して、定期的に読書討論をしながら、河上につながることの調査研究をしようとする運動もあると聞いて、まことにありがたく思っている。さらに若い学者や研究者のあいだでは、東でも西でも、河上の専攻していた経済学に限らず、その思想や人生観などから、その実践的な行動などに至るまで考察し、大きくいえば人間の生き方や考え方についても探究してみようとする学究的な研鑽がなされている。現代のようにあらゆるものが激しく變動し、ことに生き甲斐や価値観がどこにあるかが問われているとき、河上に關連して、そういうことまで一般的に論究されることの意義は大きいかと思われる。

このように考えると、この会報も、東の河上会会報と相まって、河上につながる調査研究その他で、何か役立つことがあらうかと考えるのであるが、そのためには、さらに各方面からの協力と支持を得なければなら

ない。各位のご愛護を期待し希望してやまない。

昭和五十一年度総会の報告

秋晴れの日曜日、十月十七日昼前の法然院墓地は、かなりの観光客で賑わっていた。河上肇記念会の昭和五十一年度総会は、開会前先生の墓前に詣でる会員の姿が、チラホラ見られた。八十才を超えてなお頗るお元気な稲田秀爾氏のお手により、このときすでに先生の墓は、清々と濡れていた。また不自由な体をおしてご出席の塚本幸七氏の墓前供花等々、まことに有難いことであつた。このときの住谷悦治氏による境内著名物故者の墓の懇切なガイドは、会員諸氏を大いに楽しませた。(本号に掲載)

四十数名の出席者揃い、いよいよ本堂にて追悼会、引続き昼食をとりながら、大門英太郎氏の司会により、総会に移る。

末川博、住谷悦治、田万清臣各氏の挨拶のあと、先生没後三十年を記念する講演会になった。天野敬太郎氏の『『社会問題研究』について』(要旨次号に掲載)、相沢秀一氏による『河上肇の人と学問』(要旨本号掲載)を聴き、出席者一同、河上先生の生涯と業績についての関心の今日的意義を再確認できたものと思われる。暫時歓談、事務局より会務報告と歌碑拓本出版経緯、事務局新人紹介があり散会となった。待望の二十才代の新人、持田寿一、伊藤康彦両君の事務局参加は、百万の援軍に等しく、住谷氏が挨拶で強調された「老若結合」に貢献することと大いに期待する。末尾になり恐縮であるが、いつもながら山下孝次郎氏よりお酒等のご寄贈をたまわり、誌上を借りて厚く御礼申し上げる次第。

河上肇の人と学問

相 沢 秀

(一)

河上肇は、明治、大正、昭和の三代を通じて、日本の思想界で常に先駆的役割を演じた学者、思想家である。

『日本尊農論』『日本農政学』あるいはドイツ歴史学派的保護政策を主張した『日本経済新誌』所載の諸論文等に見られるように、当初は国家主義者として出発している。また経済学の分野では、ドイツ俗流経済学、古典派ブルジョア経済学の研究から出発して、『貧乏物語』を著し、ヒューマニスト河上の名を高からしめ、最後は『第二貧乏物語』の著者に変身した。マルクス主義者としての実践的な面、哲学的な素養の面、あるいは理論的な水準において、今日よりみれば、そう高いものではないと云われてもいるが、私は河上は日本において、マルクス主義特にマルクス主義経済学の土台を築き上げた第一人者であると思う。

(二)

河上の思想の形成過程または実践の道程は、紆余曲折の過程である。表面的には極端から極端に走る、節操のない学者、思想家のようにみえる。そのために批判され、ときには嘲笑を受けたこともあった。然し私は河上がこういう過程をたどったのは、真実を求める柔軟な態度をもって、真実追究の求道者として生きたためだと思う。真実追究のための柔

軟な態度の底には人間愛があり、人間に対する信頼感がある。

『貧乏物語』と『第二貧乏物語』は異質なものであり、ヒューマニスト河上とマルキスト河上の違いがあると思うが、底に流れる人間愛を本質的なものとして見極めるならば、『貧乏物語』から『第二貧乏物語』へたどりついた道は、必然的なものであったと云える。

(三)

吉田松陰の志士的な人間像を指向した防長教育会の影響を受けた少年河上の胸中には、経世家的、実践家的な意慾、情熱が在った。

獄中から昭和八年二月十八日付秀夫人への手紙の中に「年少夙ニ松陰ヲ欽慕ス 後ニ馬克斯礼忍ヲ学ブ 読書万巻竟ニ何事ゾ 老来徒ニ獄裏ノ人ト為ル」という詩があるが、ここに河上の姿があるのではないかと思う。少年河上は、私を空しくして公に奉ずると云った。その公は初期においては天皇制国家であったかと思うが、その後の思想の形成過程において、この公とは一体何であるか、真面目に考え、問題としたところから河上の格闘が始まり、そこに河上の偉大さがあると思う。

そしてこのことは資本主義発展の過程で、新しく起ってきた社会問題——貧困の問題を取り上げなければならないことになってくる。『貧乏物語』『社会問題研究』でこれらの問題が取り上げられた。

四

『社会問題研究』の第一冊で、この世の中から貧困を取り除くことの重要な意義を述べ、そして究極の目的とするところは、道德の完成であると云っている。私は河上が人間の道德の完成を最後の目的としていることを取り上げて、河上は経済の世界を倫理、道德の世界に放逐してしまつたという批判は誤りであると思う。マルクスが自由の王国において、はじめて人間の全面的発展が完成すると主張したことに相違するものがあると思う。

河上は『経済と人生』において、経済社会の理想は結局のところ、経済社会の自滅にあると云っている。この経済社会は生産の世界、労働の世界として捉えられているのであるが、労働の生産力が増進することによって、労働時間が短縮され、同時にまた労働の種類を自由に選択することによって労働の苦しみが軽減され、そのことによって人間の生活が明るくなるのだと述べている。この段階では河上には未だ労働の疎外についての理解はない。資本主義制度の枠内でも、労働時間の短縮によって、量的な束縛から労働を解放することはできるが、質的な側面からの解放がなされないかぎり、真の意味での人間の解放はありえない。

(四)

河上は初期に、社会主義についてどのような考えを持っていたか。『社会主義評論』『時勢之変』をみても、社会主義には若干、不信感、あるいは毛嫌いがあったのではないかと思う。

河上のマルクス主義研究の本格的旅路は何時始まったか。大正十四年が転期であるともていいのではないか。同年七月号の『改造』で植田民蔵が、『社会主義は闇に面するか、光に面するか』という論文で、その前年発表された河上の『資本主義経済学』の史的発展を批判した。この植田批判や植田批判が転機となって、哲学あるいは唯物史観の研究、さらに『資本論』の研究へと続くのである。彼の「旅ごろもはらいもあえぬ我ながら また新なる旅に立つかな」という歌は、この時期にいよいよマルクス主義者としての研究の本格的な道に入ろうという決意を表明したものである。

(六)

『資本主義経済学』の史的発展は、植田批判にもあるように、マルクスの立場からの経済学史ではない。

しかし河上の本来的関心は、利己心と非利己心の問題である。利己的

活動を承認することによる社会的効果はどういうものであるかという一つの課題に対して、倫理、道徳思想をも含めての広い意味の経済思想を逐一展開し、集大成したのが、この著作であり、今日においても経済学史上大きな位置を占めている。

しかしこの段階では、河上の資本主義についての解釈は、個人主義の組織が資本主義であるというように考えており、絶対剰余価値生産を絶対的な法則とする階級関係的な生産関係体であるという認識には未だ到達していない。従ってこの著作は、その意味で不十分なものであり、あくまでも人道主義的な見地に立ったものである。

(七)

それ以後、河上のマルクス主義者としての著作は、昭和二年私達の講義であった『経済学大綱』『マルクス主義経済学の基礎理論』『マルクス主義経済学』『第二貧乏物語』『資本論入門』となっている。

私は『資本論入門』は『資本論』第一巻の解説書であるが、ただ単に書斎派マルクス経済学者によって、解釈学的になされたところの著作ではなく、河上自身の極めて情熱的な意欲が漂っている立派なものであると思う。今日においても、これの右に出る『資本論』の解説入門書に、私は接しておらない。

(八)

人間河上肇の人となりはどういうものであったか。『自叙伝』に詳しく、同時に『自叙伝』は河上思想研究上、欠くべからざる資料である。

河上をして最後にマルクス・レーニン主義者として終止符を打つに到らしめたものは何であるか。人間愛を基礎においた真実の求道者であり、そのことは同時に絶対的な非利己であり、さらにそれは無我である。己を空しくして奉ずるところの公は、人民大衆であり、この人民大衆に報いられることを期待せずに奉仕する信念、そしてその信念のもとに、安

心立命の境地をみるとすれば、この境地こそ、まさに宗教的真理である
と云って差支えなからう。この宗教的真理と一体となって、マルクス主
義という学問上の真理、それに基礎をおいた人民に奉仕する革命的な活
動が行なわれるとするならば、何ら宗教的真理と学問的真理との矛盾対
立はありえないのであって、河上において、まさにそれが一体になっ
ていると云ってよいであらう。

(四)

河上は正直で、人に騙されても、人を騙すことのない人柄であった。
同時に勇気のある一本気で情熱的な人であったと思う。

とかく人間は、自分の弱点や恥部を覆い隠そうとしがちである。河上
においては、自分の弱点や恥部を大胆に表白し、自分が真実と思った理
論が間違ひであると考えられるならば、卒直に自己批判して新しい旅を
続けていく。また人を批評するにあたっては、実に辛辣なところがあっ
た。一本気で情熱的であつたためか、人の行動を批判するに狭量なところ
があつたように思われる。

(五)

河上は学者たるものの、もっとも心すべきことは、学問は立身出世の
ためにやるものではなく、また売名のためにやるものでもない。ただ心
に止めおくべきことは、愧をかかないということだと常に云っていた。
昨日までは軍国主義的思想を鼓吹していた学者が、一夜明ければ民主
主義者に早変わり、そしてまた雲行きが怪しくなれば、再び反民主主義者
になるというようなことが、もしあるとするならば、学者、研究者とし
て、もっとも愧すべきことである。

(六)

河上の若き日の行動を狂気とみ、晩年の革命的な実践を、分を弁えない
思い上った行動であると批判する人があるが、これは當っていない。

真実追究の求道者として、辿り辿ってきた道が、ここにあつたのである。
必然的に辿ってきたところの道であり、人間愛を基礎においた真実を求
める柔軟な態度が然らしめたところのものであつたと思つてゐる。(文
責 事務局)

歿後三十周年記念連続講演会

第一回講演会の報告

記念会行事の一つとして、隔月に京都、大阪交互に会場を変え、年間
六回、河上先生の人格と業績に関する連続講演会を計画し、今回左記の
ように、その第一回目の講演会を開催した。

これは河上先生に対する関心を一層広く且つ深いものに高め、記念会
に更に多くの市民、学生等の参加をうるための一つの契機としたいとの
願いにより、事務局で計画したものである。

* 演 題 「一九八〇年代と河上肇」

* 講 師 前同志社総長 住 谷 悦 治 氏

* と き 一九七六年十二月九日午後六時半より

* と ころ 京大薬友会館

最初のことと宣伝の不行届きのためか、期待したほどの来聴者をえら
れなかったが(二十一名)、若き頃河上先生の講義を聴かれた住谷先生
が語る河上先生の人間的魅力、現在の河上研究の諸立場、それらが一九
八〇年代に向けて、若い人達にどう継承されていかなければならないか。

これは、まことに有意義なものであつた。(講演要旨は次号掲載予定)
講演後の座談会では、末川博先生の特に若い会員への激励、東京河上

会世話人白石凡氏の現況報告と東京、関西統合問題の話、近大・二部商経研究会伊藤康彦君の歿後三十年記念講演会の報告、今年の京大河上祭実行委員藤江昌嗣君の報告などがあり、住谷先生と丹精の「河上梅干」(その由来については本誌「事務局だより」に所載)をいただき散会した。なお次回からの講演会については、数日前に朝日、毎日、読売、日経サンケイ、京都新聞の各紙の催物案内欄にてお知らせします。

経済理論学会の記念行事について

杉 原 四 郎

経済理論学会は、近代経済学の研究者の学会である理論・計量経済学会に対抗してつくられたマルクス経済学者の学会で、毎年秋に全国大会が開かれる。去る一〇月一〇・一一日の両日にその第二四回の大会が京都立大学であったが、第一日目の一〇日に河上肇博士歿後三〇周年の記念行事が大会のプログラムに編み込まれた。

行事は二つあり、一つは相沢秀一会員の「河上肇の人と学問」と題する講演、もう一つは「河上肇博士真筆展示」であって、共に多数の参加者に強い感銘をあたえた。河上肇の記念行事が全国的な学会の主催でおこなわれたのははじめてのことであり、経済理論学会はそれをおこなうのに最もふさわしい学会だから、河上歿後三〇年の今年こうした行事が持たれたのは、まことに意義ふかいことであった。

河上の書画の展示は数十号にのほり、林要会員の所蔵される掛軸や手

紙が中心で、津田青楓氏が特に出品された河上えがく青楓像と氏えがく河上像の一对の作品が興趣をそえた。私は林先生の御話をうかがいながら、河上が実践時代にレーニンの文章を烈々たる気迫をこめて書きおろした筆跡や、晩年の閉戸閑人の心境の一端をあらわした短歌に親しく接し、波瀾に富んだ彼の生涯と、それを貫く彼の操志に思いをさせ、身のひきしまるひとときを持つことができたのは大きな収穫であった。

第30回京大河上祭の報告

京大河上祭実行委員会

京都大学経済学部では、昭和21年以来、毎年河上肇先生を偲び、また戦前の「河上事件」に代表されるような暗黒政治・ファシズムに対する反省を含め、「河上祭」を開催してきた。河上祭の目的は「一、私たち大學生は、とりわけ真理を愛し真理にのみ忠実であるべき者として、河上肇博士が自己の生き方のなかに示された、科学的精神と真のヒューマニズムを結合したいわゆる河上精神を継承すること、二、戦前の天皇制権力のもと、大学自身がファシズムの圧力に屈してしまい、河上先生を大学から追放してしまったことに對する深い反省から、大学に強固な自治を築き上げ守り発展させること」(河上祭趣意書)であり、本年は「学問と社会」をメインテーマとして、6月10・12・14日の3日間にあつて開催された。以下、簡単にその内容を記し、第30回河上祭の報告にかえたい。

6月10日 「河上祭の夕べ」(京都金館)

甲南大学教授杉原四郎氏の「河上肇の貧乏物語」と題した講演と、安保・チリの映画を通じ、河上精神と民主主義について考える機会をもつ

た。

6月12日は、テーマの趣旨からシンポジウムを企画したが、残念ながら、講師の先生の都合で実現せず、急遽映画会に振り替えられた。

6月14日には、大阪市立大学の宮本憲一助教授を招き、メインテーマ「学問と社会」に関する講演会を開催。宮本氏の公害反対運動等の実践に基づいた講演内容と、学生の問題意識が合致し、大きな盛り上がりを見せ、今年の河上祭のしめくりにふさわしいものであった。

催しの内容は、以上のものであるが、その他、パンフレットを作成した。

30回を迎えるにあたり、過去の河上祭資料をふまえた特集記事、学生の論文等に加え、京大経済学部の教官であり、河上祭実行委員会のOBでもある池上、野沢両助教授に原稿を依頼した。両氏とも快諾され、パンフレットの内容を一段と豊かにする事ができたと自負している次第である。

以上、極めて簡単ではあるが、第30回河上祭の内容報告とし、併せて、開催にあたり、物心両面での御支援をいただいた、河上肇記念会、東京河上会の皆様は、あらためて謝意を表したい。

近大学術祭

河上歿後三十周年記念行事の報告

近大二部商経研究会

わが研究会は本年春より、河上肇歿後三十年にあたり「近大で記念行事を」というスローガンのもとに、学習会をはじめ、次のような活動を行なってきた。

六月二十一日、法政大学大原社会問題研究所を訪ね、前所長大島清教

授に、河上、樋田の関係を中心としたお話を伺った。

六月二十六日春季学術発表会において「求道の土河上肇を評す」と題し、当研究会のメンバー伊藤康彦が、『貧乏物語』とマルクスの窮乏化法則との比較において、河上のマルクス主義への要素を見い出そうと試みた研究発表を行なった。

十一月三日、わが校舎において「河上肇歿三十周年記念講演会」を開催した。

近大商経学部戸田京次教授が「河上肇先生の思い出」と題して、河上先生との私的な関係を中心に、歴史的背景と河上肇の思想的変遷並びに講師自身の変遷を述べられ、「河上先生の一生は唯物弁証法の人生であった」と強調された。聴講者三十数名。

また同時に近大大学通り「いずみ書店」において、当研究会OB、現役等の蔵書百五十冊程、河上文庫として展示したところ、仲々好評であった。

今回の諸行事が、河上肇記念会の御協力により成功裡に終了したことを報告するとともに、我々の「河上肇生誕百周年記念」への布石ともなったことを確認し、今後更に河上研究を深めていきたいと思っている。

京都府立総合資料館の

「河上文庫」について

竹 林 忠 男

京都府立総合資料館における「河上肇文庫」は、河上博士の人と思想を語る諸資料の収集、保存、公開を目的として昭和四十八年に設けられました。それ以来、資料の収集に力を入れるとともに、閲覧、展示等を

通じて文庫を公開し、研究者ばかりでなく、広く一般の人にも河上肇の学問や思想にふれる場を提供してきました。

このような資料の公開利用にあわせて、出版事業への協力もまた大きな意義を持っていると思います。とくにここ数年、『社会問題研究』の復刻、岩波文庫版『自叙伝』の刊行等、著作物の刊行や、河上肇に関する研究成果の公刊が相次いでおり、また昭和五十四年の生誕百年を記念して『全集』（筑摩書房）の出版が計画されています。このような出版事業においては、その典拠資料の整備が第一の前提となりますが、最近における出版事業への当館からの資料提供について、二紹介したいと思います。

岩波文庫版『自叙伝』（全5巻）が今回刊行されるにあたり、当館で保管している自筆原稿（末川博士寄託）と照合し、脱落部分等を補正して、完全な形で出版されました。また、外国における河上肇研究公刊に関して、博士の写真を送ってほしいという依頼がありました。五十一年五月末、アメリカの Gail Bernstein 氏（アリゾナ大学東洋学部准教授）から、河上肇に関する研究成果が今秋ハーバード大学プレスより出版されることになったので、それに収録する写真（未発表のもの）を送って欲しいということでした。当館所蔵の写真の中から3枚を選び、ご遺族の羽村静子さんのご了解を得て送付しました。

「河上肇文庫」の公開展示については、当館の常設展示場において資料の一部を公開することもあり、当館で行われる研究会、講演会等を機会に、特別に展示することもあります。昭和五十一年十一月二十七日開催の日本出版学会公開講演会には、博士の自筆原稿、遺品等を展示して、博士の人と思想を知っていただくことができました。

河上肇に関する研究が進んでくると、それは単にわが国のマルクス主義経済学研究の範囲にとどまらず、日本近代思想史上に大きな位置を占

めるものとして、その学問・思想・人物の全体像の解明が進展していくものと考えられます。このことは「手稿・ノート・書簡」等の生資料それもとくに未発表の資料の重要性がこんごますます高まってくることを意味しています。昨年から今年にかけて、当館へ寄贈されたこのような貴重な資料は次のとおりです。

(一)寿岳文章氏寄贈 ①自筆原稿「陸詩鑑賞」「放翁鑑賞」「孟浩然詩鈔」計十二点 ②書簡（複製）六十四通 ③遺品（書入のある蔵書）四冊

(二)相沢秀一氏寄贈 ①遺品（扇子）二点 ②葉書 七通 ③書 一点
(三)塚本幸七氏寄贈 ①遺品（軸ほか）二点 ②色紙 二点 ③切紙 三点 ④書簡 一通 ⑤署名入著書 七冊

四岩波書店寄贈 自筆原稿（複製）『自叙伝』の元になった原稿（入獄記の一部分）のコピー

以上のほか、著書や河上肇研究書などについても、多くの方々からご寄贈いただきました。

当館の河上肇文庫の一層の充実のため、今後とも皆様方のご支援ご協力をお願いいたします。（筆者 京都府立総合資料館文献課勤務）

法然院墓地ガイド

聞き書き——住谷悦治氏からの——

河上 肇 大内兵衛氏の揮毫による。

谷崎潤一郎夫妻

二つの墓石の間に、谷崎の好いた平安神宮のしだれ桜の根わけした苗を植えてある。指くらのものが、今は四月に花ざかり。谷崎氏が生きていたとき、自

ら慰めたとの事。石、時子夫人「空」

左、谷崎「寂」 自然石へ彫刻。

石川 興二 河上肇作及び筆、漢詩、七言絶句。

九鬼周三 碑 西田幾太郎揮毫。側面に「寸心」(西田博士雅号)

ゲーテの詩が彫ってある。「見はるかす山の頂、

梢には風も動かず………しばしまて、やがて

汝も休(いと)はん」

玉城 嘉一郎 湯川秀樹博士の恩師、湯川氏が米中も帰国するたび

に墓詣でした。

浜田 青陵 京大教授、日本考古学創設と言われる学者。八角柱

の珍しいデザイン。新羅(しらぎ)系統のデザイン。

内藤 湖南 京大教授、在野の風を持つシナ学者。

河田 嗣郎 河上先生の揮毫。弟子福井孝治氏らと散歩したとき

先生自ら羨望の呟きを発し、それが後年、石川興二氏により、現在の河上先生の墓地となった。

川田家(川田剛一順、エトセトラ) 堂本印象、福田平八郎氏等々西

へ森の下を辿ると、ひろびろとした新墓地に、「怪奇美の誕生」の

著者、同志社大教授、園頼三。立命大政治学教授、前芝確三。静岡均、京大経済学教授の、それぞれの美しいデザインの美しい墓が点在する。

河上肇歌碑拓本のこと

大久保 雅 撰

たどりつきふりかへりみれば山川を

こえては越えて来つるもの哉

一九三二年作の歌だそうで、太平洋戦争のはしりが満州で戦われた年という事でしょうか？ 三一年生まれの私に、この時代の雰囲気は伝えられる訳もない。この面は先輩会員の御教示に俟つ。作歌の心については、自伝によって心の理解が可能であるとの仮説を許せば、之に就くにはくはない。年譜は、三二年、先生の共産党入党を救える。

この碑、京、哲学の道を上った法然院の河上さんの墓の傍に立つ。

或は聳り立つと言うべきか？ 碑についての私の蒙を啓く為とて、若い魯友M君は、石川興二氏の著書を抜萃し、与えて呉れた。同書によると、河上さんは殊に法然院を愛され「酷ダ物情ノ静カナルヲ愛ス スノ地希クバ屍ヲ埋メン」との漢詩をものされていることにも依って、選定された場所だとの事。碑の文字も、先生自ら、会心の作と称されたものを刻む。碑石は仙台石で、台石は鞍馬石の由。

この3メートルに及ぶ大歌碑は、拓本取りには至って気難しい。

雨は駄目、晴も駄目、風は禁物。この手の気難しさ、果たして、

河上のなりや否や？ 拓本縮刷の可能性につき、Y先生の判定を仰いだ

日、東山々麓は霧雨がよぎって止まなかった。拓本愛好家のS氏に依頼

して、今日、法然院へと、伊勢、奈良、大阪から集まると、京都駅で降

っていた雨足は絶え、風も死んだ曇天となるころ、さすが河上さんや

S氏手作りの諸道具を並べ、まずは碑を清める。紙の水張りにかゝる

が、画仙紙全紙でも収まらぬので、二枚継ぎ。気泡を取り去り、文字

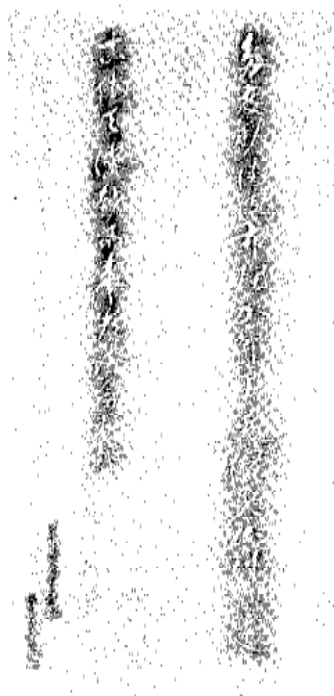
の輪郭を浮き立たせ、乾き加減のチャンスを狙う。

この時、歌碑には稀な背骨の強さを見せていた文字の列は、

勁さをそのまゝに細部の姿を現わし、限々にまで張りつめた精神を

顕現する。 恩を飲む儼かの時の後、紅絹のたんばに少量の墨をふくま

せ、軽く叩く。千度叩けば一文字が飛び出る。千遍一文字、かく、たどりたどり歌となれば、墓地の夏は終ろうとして、夕霧となった。



希望者への頒布について

(申込先)

A、京都市左京区下鴨半木町 京都府立総合資料館

●606 でんわ(〇七五)七八一局九一〇一

B、大阪市南区長堀橋一丁目 丸善石油ビル内 千代田商事(株)

大門 栗太郎

●542 でんわ (〇六)二五二局三六九六

(姿と頒価)

鳥の子に平版単色刷 縦八センチ×横四一センチ

東川博先生の説明文共 筒入 三、四五〇円(送料含む)

残部 一二〇部 申込受付順

事務局だより

◆法然院のこと

今年は先生歿後三十年を迎えて、法然院の河上肇、秀夫妻の御墓も、そして門人達の建立した「歌碑」もいよいよ錆がついて一段と鎮もって

来た思いがする。(歌碑の拓本の出版については、別稿参照)

墓域とお墓のお守については、遺族の方々は勿論であるが、住谷先生御夫妻、稲田先生が四時を問わず心を配って下さっている。

墓域に植わっている梅の木も順調に成長し、この木に実る梅の実、御遺族の許しを得て毎年その時季に住谷先生と藤木園長とが収穫、丁寧に梅干に漬けて居られて大切に保存、例年、法然院に於ける河上肇記念会の総会の弁当に添えて下さっているのは、御出席の諸兄姉の御存知の通りである。(本年は都合により割愛した)

又、住谷先生が最も熱心な法然院の御墓の紹介者、案内者の特志家である事は周知の事であり、また安井功さんが、数多くの人々をお墓に案内、独特の説法で先生の頌徳に務めてくれている。

河上肇記念会が発足したのを機に、立野正一氏の骨折で名刺愛を設け参詣者の芳名をうけているが(この名刺愛も大分朽ちて来たので今年は青竹製のものに変えた)只今、二百を越えている。記念会は次の様な礼状を出している。

「河上肇、秀夫妻の墓に参詣いただきありがとうございます。こゝ法然院の土の下に「真実を求める柔軟な心」をもち、「人間を愛する清純な気持」ではげしく、勇敢に生涯を生きた史上にもまれなユニークな存在であった河上肇先生が眠っております。先生を敬慕する者達で河上肇記念会なるものを作っておりますが、こゝに頂戴した御芳名は会の記録にとどめて、あなた様と先生とのゆかりを大切にさせて頂くと共に、御遺族にも御芳志を御伝え申します。ありがとうございます。

ひとやなる君をたづねて帰るさの荒川堤草萌えにけり

河上秀「留守日記」より

長き足らくにすわれと吾妹子が縫うて待ちにしこの庭蒲団よ

河上肇「出獄の手記」より

これに対して反響を得ているが、最近のものでは、山形県東根市の村山ひで女史から次の様な心あたゝまる御便りを頂戴した。こゝに再録させて頂く。

『ごていねいなお集がきありがとうございました。京都にいったらぜひ先生のお墓にお詣りしたいと考えていました。親しい友だちと二人で久しく先生の前にめかつきました。幸い私が名刺をもっていましたので恥しいけど入れました。私が若い日によんだ先生の「貧乏物語」がどんなに私を成長させてくれたでしょう。嵐の中に生きた私たちでしたが、永い間、闘うことが出来たのも先生のおかげでした。最後までこの魂しを持ちつゞけて生きたいと思っています。最後までこの魂し

ありがとうございます。

かしこ

河上肇記念会 皆さま

法然院では梶田住職が亡くなられて、橋本峰雄師が後をおつきになった。橋本親下は、河上肇の研究者でもある哲学者で神戸大学の教授である。先日、記念会の後、三十年忌の法要の導師をつとめて頂いたが、その時のお話に、この本堂の縁側に幾度か河上先生がひとりひっそりと腰を下ろして憩いをとっておられたであろうという事であったが、法然院が一しお私どもにとって親しいものになった気がする。

◆恒例・春の筍狩懇親会のこと

会員、小泉氏の好意による恒例の筍狩は、本年も河上肇記念会、京大白川会の共催の形で四月二十三日、筍のしゅんの好日を選んで、洛西、千福筍園で催す事が出来た。東京からの珍しい人々の参加もあり、野趣横溢の竹林の中のテントで、とりのすき焼でまことにやわらかい日本一の筍を味わい、酒を酌み交しながら互に久闊を叙しながら、思い思いの談論風発にたのしい、しかも意義のある時間を持つ事が出来た。末川先

生は差支えあって今年は欠席されたが、住谷先生御夫妻、九十叟福田秀爾老国手の御元氣な参加を得た事を特筆し度い。歓を尽くして再会を約しながら散会。午後四時。

出席者（敬称略 順不同）

清水重男、平沢俊男、杉崎三八郎、斎藤榮治、住谷悦治、住谷よし江
山田幸治、稲田秀爾、竹山貞子（竹山増次郎氏未亡人）、岩城孝次郎
岩城牧、小泉仁一郎、藤谷小一郎、岡部利良、児玉誠、小林康宏
小林寛、小泉秀三郎、山下孝次郎、小泉民次、岡村孝雄、村尾晃
大門英太郎

尚、会員山下孝次郎さんから充二分の清酒の差入れの特色があった。

記して感謝の意を表し度い。

◆記念会これからのこと

わが記念会の運営については、発足の機となった昭和四十七年の遺品展、講演会、図録出版等々の事業の後、世話人の中心の様な恰好になった小生の能力の不足と限界もあってまことに不充分、不満足の有様であって申し訳けない次第であるが、近時、昭和世代の諸君の事務局への参加を得て格段の力を充実、事業計画も整え且つ実行する力を得る事が出来た。

即ち、年四回の会報の定期的発行、年六回の研究会を兼ねた講演会の開催、秋の法然院における総会の開催等の実行である。更には、河上先生生誕百年記念に向っての事業の計画立案、又東京河上会との連絡の緊密化と更に進んで発展的統一の問題。特に河上肇記念会存在の意義の重要性そのものが益々大にならねばならぬ重大な時期と考えれば、私共の責任大である。

従って会員も会報等を通じて益々獲得しなければならぬ次第であるが、今迄頂戴している年会費千二百円は郵便値上げそれだけでも耐えがたい

負担になっている現状で、十月十七日の法然院総会に値上げを提案すべきであったのであるが、スタッフの諸般の計画が熟するにつれどうしても次回からは、三千円を御負担願わねばならぬ事に相成った。別項事務当局の抱負を大いに御酌みとりの上、御諒承願う次第である。(大門)

編集後記にかえて

事務局そのおの思うこと

あけまして おめでとうございます

事務局一同

★近大で行なわれた講演会(報告は本誌掲載)終了後、アンケートを集約すると、『貧乏物語』を読んだ方が九〇%近くあり、驚くことしきり。また「マルクス主義経済学の源」、「河上なくして、日本のマルクシズムは論じられない」と云った「河上評論」から「河上は『マルクス主義と宗教が共存』(山川均)」と云った批判的「河上観」が提出されたことをこの場を借りて報告します。なお当日使用した『論集』入用の方は切手一五〇円同封の上、左記へお申込み下さい。(伊藤康彦)

東大阪市小若江三―四―一 近大二部学術部商経研究会

★先輩や同輩や、殊に若い人達から刺戟され、啓発されて、ちっとは人間らしい動きが出来るようになったとの願いで、お手伝いさんにしてもらいました。ですから会に寄与するよりも、迷惑をかける事の方が多くなる恐れ充分です。優等生とは、根柢から縁のない存在が紛れ込んでいることも、世の中の大部分は優等生ではない訳ですから、会の中を非優等生的方向へ拡げる象徴的意味があるのでは……?

そんな乱れを持ち込む者を許す大きさを、会は、いつまで持ち続けてくれるでしょうか?(大久保雅撰)

★河上肇博士が、その生き方において示された、真理にのみ忠実である

態度、そして、真理と共に人間を愛してやまない精神こそ、私たちが受けつぎ、守り、発展させていくべきものである、と信ずる学生諸君の手により、河上祭は今年で三十の歳をかぞえた。そして「河上肇記念会」も初めて河上祭パンフレットに広告をだした。京都会館での河上祭の夕べや日伊会館の講演会に集まる若い人達をみて、何かを求めようとするいまの青年たちと戦前河上博士とともに時代を生きたオールドロマンチストたちが、一緒に河上祭がやれたらなあ、とふと思った(岡村孝雄)

★総選挙も終り、中道政治の登場といわれているが、川面のきらめきにも底流に太き筋なく、流れにまかされてゆくだけ。戦後三十年をこえて河上博士法然院で「革命未だならず」と嘆かれることしきりに進まない。何事も信念と情熱をもってすれば、果されないものはないはずであってウーンとうなっている毎日です。やっと第二号が届けられるようになりましたが、皆忙事の身で、東京の田中文蔵さんはえらかったなあと感じ、我が身の致らなさを反省しております。(小泉民次)

★生きた河上さんを知らない昭和一ケタ生れの私には、河上さんに惚れるにも幾らか難儀する。この意味では、記念会の大先輩諸氏の世界の遠くに位置するようだ。学生時代の河上祭との関わりにしても、それがその前後に続く何々闘争といった諸々の学生運動の一齣にすぎなかったからだ。それから二十幾年、無我苑に走り、共產党へ行った河上さんのような生涯を、己れの乏しき営為をもって、真実なりと思ひ込めるのかどうか。これから起る記念会での諸々の事柄のなかで、少しは真面目に探っていくかと思っている。(杉山幸雄)

★入会して半年余り、まさか『会報』の編集を行なうとは思ってもいなかった。この光栄にこたえるためにも、今後とも「バリバリ動かねば」と燃えているところです。一つの企画として、河上先生の古書をたずねた放浪記など書いてみたい。(持田寿一)